

# 交通の要衝と日本一の読書のまちの深化が示す まちづくりは「道づくり」そして「人づくり」

至便な交通網の構築で発展  
好感度の高い扇の要都市

埼玉県東南部に位置し、江戸川（利根川水系分流の1級河川）と中川（利根川水系支流の1級河川）の二つの大河に挟まれた、埼玉県三郷市の南北に細長い地形（南北約9.5km、東西は最大部分が約5.6km／面積30.22㎢）は、ヨーロッパ大陸から地中海に突き出て、長靴にも例えられるイタリア半島の形をほうふつさせる。

イタリア半島は大陸につながる北部以外の三方を地中海に囲まれている。三郷市は埼玉県吉川市と

地続きの北部以外、例えば市域の東側は市境の江戸川を隔てて、千葉県流山市および松戸市に接している。同様に、西側の市境には中川が流れており、中川を隔てて埼玉県草加市および八潮市に接している。

市域の南側は、江戸時代に中川をせき止めて築造された巨大な農業用ため池「小合溜井」（現在は準河川指定）が市境を形成。小合溜井を隔てて東京都葛飾区と接しており、小合溜井は三郷市側では「みさと公園」の、葛飾区側では「水元公園」の基盤を成している。

三郷市域には、江戸川や中川より川幅はかなり狭いものの、同じ1級河川の大場川と第二大場川が、江戸川や中川と並行する形で、やはり市域北部から南部を貫流しており、市域南部で小合溜井に注ぎ込んでいる。

さらに、三郷市の地形をイタリア半島と同じ長靴に例えれば、ちょうどくるぶしに相当する部分に細いベルトが巻かれている

きづまさあき  
木津雅晟  
三郷市長

ようなあんばいで、中川と江戸

川をつなぐ三郷放水路

（全長約1.5km）が、市域の東西を横断している。三郷放水路は、三郷市域の中では江戸川と中川の本流が最も接近している部分に掘削された。

また、市域中心部が東京都心部から20km圏内の至近距離に位置し、四つの1級河川および準河川や放水路が形成する「天然の環濠都市」の様相を帯びる三郷市は、1都2県（東京・埼玉・千葉）を結ぶ「扇の要」にも例えることができる、地理的条件を有して



盛大に開催された市制施行50周年記念式典（令和4年5月22日実施）



水の都・三郷市の治水事業の要「三郷排水機場」(手前の水流は三郷放水路)

いる。  
豊富過ぎるほどの水資源に恵まれ、平た  
ん地が大半を占める地勢的な特性は、現在  
の三郷市エリアが近代以前から早場米の産  
地として、また、河川を活用した農産物の  
物流拠点(集散地)として栄える要因とも  
なった。

埼玉県東南部一帯の土壌の基盤は、かつ  
て、中川が形成してきた湿地帯「中川低地」  
や、江戸川流域の広大な低湿地とで形成され  
ていた。江戸川と中川に挟まれた三郷市は、  
まさにその真ただ中にあるわけだが、こう  
した地勢の土壌は肥沃で、農産物の生産に向  
いている半面、水害が多発しやすいというリ  
スクも常にあった。

前出の「三郷放水路」(昭和  
54/1979年竣工)は、低  
層地で水はけの悪い中川流域  
の「洪水体質」を改善するた  
め、大雨などによって流量が  
増え過ぎた際の中川の水を、  
江戸川に逃がすことなどを主  
目的に建設された。加えて三  
郷放水路の江戸川側に「三郷  
排水機場」(平成8/1996  
年竣工)が設置されたことに  
より、中川上流における浸水  
被害はより一層に軽減され、  
同時に放水路を横断する大場  
川流域の内水被害の軽減、中

川下流部の水質改善、江戸川の利水安定化  
なども、効果的に図られるようになった。

こうして、豊かな水資源に恵まれた上に、  
治水事業の成果で湿地帯からも脱し、平た  
ん地の多い三郷市エリアは、「都市農業が盛  
んで、市民の憩いの場となる水辺空間が豊  
富な、首都圏近郊の好感度な住宅都市」とし  
て、昭和40年代後半(1970年代前半)か  
ら急速に発展していく。



都市農業の盛んな三郷市。自慢の朝採れ野菜がズラリと並ぶJA野菜直売所「べじ太くん」

とりわけ、三郷放水路の建設と並行する  
形で、昭和47(1972)年5月3日に旧三  
郷町が三郷市へと市制施行したこと、翌昭  
和48(1973)年4月1日に、神奈川県・  
東京都・埼玉県・千葉県を結ぶ、首都圏の「外  
環鉄道」ともいえるべきJR武蔵野線の開業に  
伴い、域内に初めての鉄道駅「三郷駅」が  
設置(昭和60/1985年には新三郷駅も開

業)されたことは、首都圏近郊の住宅都市と  
しての三郷市の発展を、加速度的に高める  
効果を発揮した。

さらに、平成17(2005)年8月24日、  
秋葉原駅(東京都千代田区)と、つくば駅(茨  
城県つくば市)までの総延長約58kmを、最速  
45分間(秋葉原〜三郷中央駅間は約20分間)  
で結ぶ第三セクター「つくばエクスプレス  
(以下、TX)」(※株主は三郷市やつくば市  
を含む15の都・県・市・区と、民間企業な  
ど総計188団体)が、平成6(1994)年  
10月の起工から11年目で開業。付随して、  
三郷市内に三郷中央駅が開業するとともに、





三郷中央駅の前面、第二大場川沿いに整備された「におどり公園」には、市の複合交流施設（三郷中央におどりプラザ）、ホテル（東横イン）などが並ぶ



TXの開業を契機に進められた三郷中央駅周辺のまちづくりは、まさに三郷市の中心軸を構築する事業となった

相次いでいる。

以上、市制施行前後からの三郷市の歴史を

三郷中央駅に隣接する南流山駅（千葉県流山市）でJR武蔵野線と連結したことで、住宅都市としての三郷市の発展はより一層に加速し、現在に至っている（※市制施行時／昭和47年の三郷市の人口は5万人弱、市制施行から54年目の本年7月1日現在の人口は14万1916人）。

三郷市は、道路交通の環境面においても至便さに満ちている。三郷ICを軸に首都高速6号三郷線や常磐自動車道、東京外かく環状道路などの広域交通網の中心に位置する三郷市には、東京都心部とのアクセス環境の良好さと1都2県の「扇の要」としての地理的条件とが相まって、近年では住宅地としてだけでなく、関東一円の物流拠点としての重要性も飛躍的に高まり、まさに今、巨大物流センター（三井不動産ロジスティクスパーク三郷、オリックス不動産ロジスティクスセンターなど）の着工、建設計画立案などが

駆け足で振り返ってみたい。その上で、改めて注目されるのは、三郷市誕生から4人目の首長となる木津雅晟市長がその間、昭和44（1969）年からは三郷町・三郷市の職員として、平成9（1997）年からは三郷市議会議員（3期）として、平成18（2006）年11月以降は三郷市長（現在5期19年目）として、三郷市の急発展に、それぞれの立場で深く関わり、けん引してきたことである。

ちなみに前述した通り、三郷市は昭和47年に旧三郷町（昭和39／1964年に町制施行）が単独で市制施行しているが、旧三郷町の前身である旧三郷村は、三つの村（旧北葛飾郡東和村・彦成村・早稲田村）が昭和31（1956）年に合併したことで誕生、「三郷」の地名は、主にこの三つの村の合併を由来としている。

### 積極的なまちづくりが奏功し 高まる子育て世代の支持

「実際、そのように考えてみますと、非常に運の良いことに、私は三郷村の前身・旧



五穀豊穡（ほうじょう）・無病息災を願い、稲藁（わら）の蛇を神社鳥居にくくり付ける「米どころ・三郷」の伝統行事「オビシャ」（1月10日）は埼玉県無形民俗文化財



2020東京オリパラを契機に始まったギリシャ共和国との交流事業は、本年度で11年目を迎えた（令和元年の市長によるギリシャ公式訪問の様様）

早稲田村に生まれ、三郷村で育ち、三郷村役場に入職して以降、三郷町から三郷市への市制施行、さらにJR武蔵野線・TXの開業、令和4（2022）年の市制施行50周年も含め、三郷市の発展の節目のほとんどに、職員・議員・市長の立場から、関わらせていただいたこととなります。

また、私と同じ旧早稲田村出身の父親・木津三郎は、旧三郷村役場と三郷町役場に勤務し、市制施行後の三郷市では助役となり、2人目の市長としても3期、務めさせていただいております。

そのような中、昭和47年の市制施行以後、三郷市の人口は、途中で多少の増減はありましたが、全般的には増加の一途をたどってきたといえます。特にJR武蔵野線の開

# 三郷市

市 政 ル ポ

(埼玉県)



昭和48年の入居開始以来、三郷市発展のシンボルともなった「みさと団地」。ピーク時には人口2万3000人を誇った巨大団地

通後に、全国有数の規模を持つ『みさと団地』を始めとする大型団地群が次々に建設されていったことや、TXが開業したこと、新設の三郷中央駅を軸とする新たなまちづくりを推進できたことは、不可避の潮流である人口減少時代における三郷市の『近未来に向けた持続可能なまちづくり』を今後進めていく上でも、大きな基盤になっていくものと自負しております」(木津市長)

三郷市の人口の推移は、実は令和4年の14万2758人をピークに、横ばいか緩やかな減少傾向期に移行しているかのように見る向きもある。しかし、前述のように、本年7月1日の段階で14万1916人を維持しており、全国的な人口減少傾向の速い流れから

は「外れている」といつていいだろう。

例えば、民間組織「日本創成会議」が、平成26(2014)年5月に発表した『消滅可能性都市』のリストには、三郷市も入っていた。周知の通り、消滅可能性都市の基準は、今後30年間(平成26年の段階では、2010年代から2040年代)に若年女性人口が50%以上減少する可能性の高さに置かれていた。

平成26年の三郷市の人口は約13万6000人であり、人口はむしろ増加傾向が続いている時期だったが、若年女性の人口増が比較的鈍化していると捉えられたのかもしれない。

「しかし、令和6(2024)年4月に『人口戦略会議』が改めて公表した『消滅可能性自治体』のリストからは、三郷市は除外されているのです。

その詳細な背景・理由は不明ですが、令和6年から本年にかけての三郷市には、例えば現在策定中の『第5次三郷市総合計画後期基本計画』のスローガンにも掲げた、『まちづくりは道づくり』という目標にもつながる、新たな動きが次々と加わり、交通利便性がさらに拡充しつつあります。

具体的には、三郷市民の念願だった『三郷流山橋有料道路の開通』(令和5/2023年11月26日)や『常磐自動車道三郷料金所スマートICのフルインター化』(本年3月22日開通)などの事業の完成です。

中でも、江戸川に架かる三郷市と流山市を結ぶ唯一の橋であった流山橋は、これま

で慢性的な渋滞に悩まされてきましたが、三郷流山橋有料道路が開通したことにより、流山橋に集中していた交通量が分散し、渋滞の大幅な緩和が実現しました。

また、上り線(東京方面)出口と下り線(水戸方面)入りの利用だけに限定されていた常磐自動車道三郷料金所スマートICが、本年3月から上り線・下り線双方の出入り口全てを利用できるフルインター化が実現したことも非常に重要で、三郷流山橋有料道路の開通と合わせて、新たな周辺開発事業や地域産業の活性化など、さまざまな波及効果を既に生み出し始めています。

そうした地域全体の総合的な活性化は、人の流れをスムーズにするだけでなく、地



三郷市にとって江戸川に架かる3番目の橋、三郷市と流山市を結ぶ「三郷流山橋有料道路」の効果は計り知れない



「日本一の読書のまち」宣言の翌年、平成26年に開館した「三郷市わくわくライブラリー」は市立図書館と郷土資料館の複合施設

## 日本一の読書のまちを目指す 心の豊かさが基盤の近未来

さらに若年女性や子育て世代が「住んでみたいまち」「子育てしたいまち」の重要条件の一つとして、雑誌の特集やネット記事など

域内への企業進出と、それに付随する雇用の場の選択肢の拡大にもつながります。これまで地道に実施してきた手厚い子育て支援や、学習支援なども相まって、子育て世代の方々や、これから家庭を持つとする若い女性たちの三郷市への好感度も高まりつつあるという実感が、私たちにはあります。そんなことを全て総合した上での《消滅可能性自治体》リストからの除外、ということなのかもしれません」（木津市長）

でもしばしば話題になるのが「心の豊かさを感じられる住環境」だ。そうした視点から三郷市のまちづくりを捉え直したとき、改めて注目されるのが、平成25（2013）年3月の宣言から本年度12年目を迎え、活動の幅が年々、より広く、より深化し続けている「人づくり」への取り組み、「日本一の読書のまち三郷」事業の現状だ。

「平成25年3月に『日本一の読書のまち三郷』を宣言したときには、議会などからも『読書を大切にする趣旨は結構だが、何をもって日本一とするのか』というような意見が出したものです（笑）。

しかし、同年9月にノンフィクション作家・柳田邦男さんが三郷市読書活動応援団長に就任してくださったことや、翌平成26年6月に市立図書館と市立郷土資料館を一体化させた複合施設『三郷市わくわくライブラリー』を開館させたことなどが契機となり、この取り組みの趣旨への理解が、市民の皆さまにも議会にも、一気に高まっていったように思います。日本一というのは、例えば市民1人当たりの図書館の貸出冊数日本一を目指すというような、数値的な競争や成果を目指すために冠した表現ではないのです。

JR武蔵野線やTXの開通、さらには道路交通網の拡充などに伴う雇用の場の拡大、および地域経済の活性化、新三郷駅前前の「新三郷ららシティ」の存在など大型商業施設群

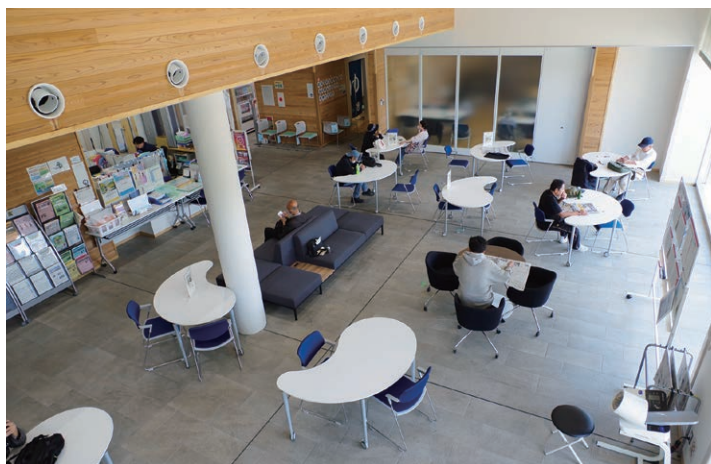


JR武蔵野線・新三郷駅前に立地する巨大ショッピングセンター「新三郷ららシティ」内に設置された観光交流施設「ららほっとみさと」

の進出が象徴する便利な生活環境の拡充、江戸川・中川がつくる豊かな水辺環境、三郷中央駅を軸とする新中心市街地の構築など、器としての三郷市のまちづくりは市制施行以来、たゆむことなく進めてきたという自負があります。

しかし、三郷市の持つそうした器としての暮らしやすさや、便利な都市的環境を単に享受するだけでなく、既に暮らしている市民の皆さまには、ここですと暮らしていきたいと思っただけのようなまちづくりをしていきたい。

市内外で暮らす若者たちには、ここに住んでみたい、子育てをしていきたいと思っていただけのようなまちにしたい。



子育て支援センター、図書館、市の窓口、入浴施設などが一体化した「三郷市立希望の郷交流センター」は、市民活動・文化活動・多世代間交流の拠点だ



「日本一の読書のまち」を支える事業の一環「子ども司書養成講座」は本年度で14期目を迎えた(第11期閉講式の模様)

三郷市を全国発信するコンテンツとしても、大きな役割を担っている。

そして取材直後の本年6月1日には、日本一の規模を持つショッピンゲモール「イオン越谷レイクタウン」が沿道に立地する国道4号東埼玉道路が、三郷市に隣接する吉川市から松伏町まで

また、活字離れの進む子どもたちには、地域を挙げて推進する読書環境の充実化に触れることで必ずもたらされる、成長期に不可欠な、無尽蔵の『心の栄養』を吸収し、のびのびと育ってほしい。

つまり『日本一の読書のまち』の取り組みとは、近未来に向けて持続可能なまちを形成していくのに不可欠な、そんな『住んでいるだけで心の豊かさを感じていただけるようなまちづくり』を目指すための、象徴的な核となる施策・事業なのです(木津市長)

そして、応援団長・柳田邦男さんのサポートを得て、読書習慣の醸成に資する多彩なイベント・事業(講演会、シンポジウム、幼

少児童への読み聞かせ運動の推進、子ども司書の養成、移動図書館／ふれあいブックワゴンの導入、地域の民話集出版など)が随時実施されてきた。平成27(2015)年には「日本一の読書のまち三郷推進計画」を策定。平成30(2018)年には「日本一の読書のまち推進室と図書館3館を統合した『日本一の読書のまち推進課』を設置。令和3(2021)年の「第2次日本一の読書のまち三郷推進計画」策定を経て、令和5年には「日本一の読書のまち宣言」から10周年の節目を迎えた。その間には自治体をはじめ全国からの視察団をコンスタントに受け入れるなど、「日本一の読書のまち三郷」は、

延伸したため、三郷市街地の渋滞が抜本的解決に向かう一助になるという趣旨のニュースがもたらされた。三郷市をめぐる広域高速交通網のネットワークは、日々、更新されつつあるのだ。

このように交通の要衝としての深化が体現する「まちづくりは道づくり」のさらなる進展と、豊かな水辺空間や、新たな市街地の建設、企業進出などがもたらす活気が共存する三郷市。そこに「日本一の読書のまち」への取り組みなどが象徴する「まちづくりは人づくり」を体現する各種取り組みが相まって構築される、近未来に向けた三郷市の持続可能なまちづくりは、これからいったい、どのように多彩な景色を見せながら、花開いていくのだろうか。

その日の到来が、今から楽しみである。

(取材・文＝遠藤隆／取材日＝令和7年5月28日)



平成23年発足以来、消防・防災活動を通じた次世代育成、市民の防災意識向上に多大な貢献を果たす三郷市の「少年消防クラブ」